シンポジウム

2011.8.7　ピュアリティまきび孔雀
９：３０～１１：３０

「通じ合うことの意味を考える
～子供との日常の関わりを通して」

コーディネーター　肥後　功一（ひご　こういち）　氏
(島根大学教育学部教授)

シンポジストⅠ　全国ことばを育む会理事・東北ブロック

佐々木　信孝（ささき　のぶたか）さん

◇妹尾先生からは、震災について、生々しく伝えてくれということだったので話します。

被災については、テレビで放映されている通りなので、皆さんご存じの通りですが、震度 6 強から 7 でした。内陸部は地震でかなりの被害で沿岸は木造の建物だけ流されたところもあれば、鉄骨だけ残って何もなくなったところもあります。瓦礫の撤去は市町村と国の駆け引きで進まないところもまだあります。

私には、女男女の 3 人の子どもがおりますが、平成元年より長男がお世話になることで関わりが始まり、現在、岩手県親の会の会長をしております。

当日、私は南三陸町の志津川小学校に居る予定だったのですが、同僚と交換して県に補聴器の補助を陳情する為の打ち合わせのため、盛岡へ向かう途中の遠野の峠で地震情報が流れ、先にあった、宮城県沖地震より強く長い揺れを感じました。

その後は引き返し、途中、取引先に寄ってみるとすごい状態でした。

家に帰ってみましたが、灯りは蝋燭と懐中電灯、暖はカセットコンロと七輪で、熱の無いこたつで夫婦で夜を明かしました。

子どもは 3 人とも無事でした。長男は間一髪で助かりましたが、同僚の人が 2 人亡くなりました。次女は保育所の子供を抱えて必死で坂を駆け上がり、助かりました。園児全員無事で、園児を保護者に引き渡してから帰り、10 日後に会えました。長男と妻と孫は 3 日目に無事を確認できましたが、家族を捜すのは、全部泥の中を歩きでしかできず、60㎞ を山を越えて探してきた人もありました。4 日目から、家に帰れない従業員の仮設住宅を建てました。

被災してから 2 週間後に、電気と携帯が使えるようになりましたが、それまでは、車のラジオしか情報を得る方法はありませんでした。携帯を使えるようになってまず、親の会の役員に連絡を取り、3 月 31 日に臨時の役員会を開くことにしました。

総会は盛岡に場所を変え、最低限の人数で行うこと、次に親子宿泊研修は花巻で被災した人を中心に集ま

ってもらい、癒しの会にすること。そして、27 年続いている幼児言語研修講座は、幼稚園、保育所の先生方も対処に困っていらっしゃると思うので、開催することに決めました。会費は県からの援助をもらって、出来るだけ安価にする方向で、開催に向けて動いていくことにしました。

その後、各地区を廻り情報を集めました。すると、2 つの言葉の教室のある学校が、骨組みだけ残して丸ごと流されている事が分かりました。その後、教育委員会では、先生の異動を退職者の補給のみにとどめてくれたので、先生方は子ども達の状態の把握がスムーズにいきました。そんな中、間借りをした教室で 6 月から指導して下さる先生もあり、頭が下がりました。そこで私は、県内をまわり、空いている教材を借りて運んだり、親の会の指導書も揃えて、運ぶように準備しています。まだ状況は全部は把握できていませんが、現況報告はこのようです。

全国からたくさんの義援金を頂き、また、海外からも頂き、有難うございました。

最後になりましたが、その使い道を報告させて頂くことで、お礼にかえさせて頂きます。

シンポジストⅡ　島根県ことばを育てる親の会事務局長

津田（つだ）　昭美（てるみ）さん

◇おはようございます。

私には、23 歳･21 歳･19 歳の 3 人の子どもがいます。今日は、23 歳の大阪で暮らしている娘のことを話します。彼女は先天性の難聴です。生後 10 ヶ月くらいの時の健診で、病院の受診を勧められ分かりました。最初は頭の中は真っ白で、耳の図だけが今も頭に残っています。補聴器を付ける事を勧められましたが、なかなか付けてはくれませんでした。また、障害者手帳の交付を受ける話もされましたが、戸惑うばかりでした。

1 歳から聾学校での訓練が始まりました。音を聞いてことばを育てるという事をしていました。平成 4 年 12 月に通っていた保育所の先生に薦められ偉大な大石益男先生と安部満明先生の教育相談を受け、ことばときこえの教室へ通い始めました。そこで出会ったのが司会の妹尾哲巳先生です。

ことばの教室へ行くと遊んでいるだけでことばを教えられている様子はなく、大丈夫なのだろうかと思っていました。でも娘は教室ならではの魅力にはまっていきました。先生が励ましたり喜んだり怒ったりけなしたりしてくれる事で、娘は発音が身につくより、ことばを話す力が身につきました。やる気と自信を身につけて、障がいを感じさせない子に育ちました。

また、小さい頃からよく漫画を描いていました。高校は、夢を叶える為に自ら選んだ学校へ行きました。入学後、仲良くなった友達と一緒にコーラス部に入りたいと言い出し、びっくりしました。親として反対はしましたが、周りの人たちの温かい支援をもらって、ありえない事をやり遂げました。時には大好きな漫画も活用してアイディアを出すと、友達が取り上げてくれ、本人のやる気を持ち上げてくれました。

ところが、高校へ入学して何ヶ月かして、体調を崩した娘を迎えに行くと泣きじゃくっていた事がありました。何事かと聞いてみると、自分の障がいを皆に言えなかった事で、自分自身の頑張りが限界になったようでした。そんなとき、私は親として出番が来たと思っていたのですが、娘は「妹尾先生のところへ連れて

って」と言います。「私の気持ちが分かるのは、妹尾先生しかおらん」とも言いました。そこで妹尾先生に言われたのは「しゃんもんだわ（そんなもんだよ）。」でした。娘が自分の障がいと始めて向き合って苦しかった時を、共感でもなく、慰めでもない言葉で救ってくださいました。

高校卒業後、福祉の仕事がしたいと言い大学へ行きました。一人暮らしを始めた事や免許を取ったこと、そして、接触事故を起こしても得意の漫画を活用して、事故処理をしたことなど、色々な経験をして、親の心配をよそに、どんどん成長をしていきました。

今、娘は、大阪で事務の仕事をしています。会社では聴覚障がい者だと思われたくないと言い、筆談をしてもらっていましたが、現在は会社で手話講座をしてもらって、皆さんに覚えてもらっているそうです。

ふと気付けば娘は、『聴覚障がいのある私』ではなく『私という人間は聴覚が不自由なだけ』と教えてくれました。また成人しても子どもは子どもと思っていましたが、親の手の届かないところで、遥に私を乗り越えて大人になったなと思います。今でも、受診のことや補聴器の手入れなど心配していますが、娘の生きる力に感心しているところです。

シンポジストⅢ　岡山県現在通級しているお子さんの保護者

荻野（おぎの）　由加里（ゆかり）さん

◇娘は 5 年生です。私自身はことばの親の会にあまり関わっていなくて、サマーキャンプに参加するくらいです。岡野一会長を知っていたことから、何か話をしてもらえないかということで、娘の事で感じた学校や病院の現状を皆さんと話し合えたらなと思って参りました。

娘はアスペルガーと診断されました。よく怒る子で、スーパーでも転げ回って泣くので、買い物に連れて行かれませんでした。保健士さんや保育所の先生に相談しましたが、我の強い子でしょうと言われました。そうなると、私の育て方が悪い事になるので、よく叱りました。すると、東京のマンションでは、静かにしてくれと、よく張り紙をされました。

４歳の時に倉敷に帰ってきました。ところが、幼稚園に朝から行かれず、遅れて行きました。園では先生に上手く対応してもらっていたのですが、家では出来ない事を叱ったり、口答えするので怒ったり、私の子育てが悪いと親に言われ、私を含め家族みんなのストレスがピークになった頃、娘が刃物を持ち出しました。それがきっかけで、園長先生に相談し、病院へ行くことになり、ことばの教室へも通い始めました。通級の先生に「お母さんのせいじゃないから」とすごく言ってもらいました。

そこから病院の先生、通級の先生、スクールカウンセラーの先生、そして担任の先生に支えられ、助けてもらっています。でも同じ学校の子でも、通級に通っている子でも、助けてもらえていない子がいるのです。今日お邪魔したのはそこなのです。親が学校の先生や病院の先生にどう関わってどう同じ方向性を持って育てていくか、そこが何もないと思うのです。親の会も、学校も、ずっと長い間あるのに、何もでき上がっていないのはどうしてかと思うのです。岡野一さんに話すと、学校の制度の限界があるといわれました。先生は長い教職にあるのに、子ども達は６年間どんどん育っていくのに、何故ないのだろうかと思うのです。そ

れがあれば、この前、倉敷であったような悲しい事件は起こらなかったのではないかと思いました。

ところで、娘は不登校になりました。私たちは焦っていました。学校に行かなくなったら将来はどうなるのかと思って、５年生になる前に教頭先生に「学校へ来なければ行けませんか、学校に行けなかった子が立派になった人を知っていますよ。」と言われました。それまで、病院で言われた時は納得できなかったのですが、教頭先生に言われて気持ちが楽になりました。娘は学校へ行かなくなって落ち着いています。娘が学校へ行かないことを選びましたが、先生がちゃんと後押しをしてくださいます。子どもの将来に不安がありますが、周りの支えがあって今があります。

シンポジストⅣ　徳島県ことばを育てる親の会会長

みやうち　まさひと
宮内　正仁さん

◇徳島の宮内です。子どもは短大生の長女、今春特別支援学校を卒業した長男、長男と入れ替わりに特別支援学校高等部に入学した次女の３人です。長男、次女共に軽度の知的障がいがあります。

長男、次女の存在がきっかけで、訳がわからないまま徳島県ことばを育む親の会の会長をやらせていただいています。会員数は約４０名で知的障がい、自閉症、アスペルガー症候群、LD、肢体不自由などさまざまな障がいをかかえた子どもたちとその保護者・関係者が在籍しており、まさに何でもありの会、ことばの発達に問題があるというより、人との関わりの中でことばがいかに大切か、ことばのキャッチボールをいかに適切にしていくかということに重きを置いている会といってもいいと思います。主な行事は療育キャンプ、総会、講演会、四国ブロック交流会、レクリエーションなどです。あと、できれば忘年会などの酒の飲める行事を増やして会員同士の親睦を図りたいと思います。（そう思っているのは私だけかも知れませんが）

会の紹介が長くなりましたが、この辺で本題に入りたいと思います。
「子どものよかった探し」ということでしたが、これには非常に困りました。まず父親として子どもたちと接する機会がなかった、「会長」をしているといってもわが子に対しては悪いところばかりが目に付いて、いいところが目に付かなかったように思います。
小学校は授業参観には行きましたが、校長先生や特別支援学級の担任のところにあいさつに行ったのは覚えている限りではたったの２回。しかも妻にお尻をたたかれて渋々でした。中学校では３人の子どもたちが卒業するまで６年間 PTA 役員をやらせていただきましたが、障がいを持つ子どもの親としては１回も動くことはなかったと思います。

そんな私が父親について考えてみると、たとえ子どもが小学校低学年でも就労や人間関係、金銭的なことといった将来を考えてしまうのが父親だと思います。

長い前置きになりましたが、私の子どもたちは
① 私の言うことはあまり聞かないが、妻の言うことはよく聞きます。（どうやら母親がこわいらしい）
② こちらが思っているより人を見て話をしているみたいです。目上の人には敬語を使います。
③ とりあえず健康で体が丈夫。

こんなことしか思い浮かびません。
ひょっとすると私だけかもしれませんが、ほとんどの父親は得てしてこんなものだと思っています。

※ 肥後功一先生(コーディネーター)からのシンポジウムについての講評、意見は、P１７ 掲載の「 ●まとめにかえて」 より後の文をご覧ください。